

# 西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について

—豊前・筑前・筑後・肥前4国の事例を中心にして—

松村 一良

## はじめに

律令国家は東北地方の律令体制を推進するに当たり、奥羽越三国の北辺地域に城柵を設けて蝦夷支配の拠点とし、東国と陸奥国南部の人々を柵戸として強制的に移住させて支配領域の拡大を行った。

一方、この支配地域拡大の中で実施された征夷は投降した多くの蝦夷を支配地に抱え込むこととなり、出羽・陸奥両国の彼らへの支給物の経済的負担は多大なものであった。このため律令政府は両国の蝦夷に対する財政的負担を軽減し、合わせて帰降した蝦夷の公民化と、蝦夷を現地から引き離して集団として弱体化させることを目的として、帰降した蝦夷を俘囚として諸国に移配する施策をとった。

こうした俘囚の内国移配に関する文献史料としては、『続日本紀』神亀二(725)年閏正月己丑条に、俘囚144人を伊予国に、578人を筑紫に、15人を和泉監に移配した記事が初見である。同じく『続日本紀』宝亀七(776)年九月丁卯条には陸奥国俘囚395人を大宰府管内諸国に分置し、同年十一月癸未条には出羽国俘囚358人を大宰府管内及び讃岐国に分配したことがみえる。さらに時代は前後するが、天平十(738)年の『駿河国正税帳』には、陸奥国から摂津職へ向かう俘囚115人に対する給粮記事が、また同年の『筑後国正税帳』には、陸奥国から筑後国に送られた俘囚62人に対する給粮記事がみえる。一方、『延喜式』巻26「主税上」には、俘囚料、夷俘料が計上されている国が35か国にのぼり、また、『和名類聚抄』巻6～巻9には上野、播磨、周防国などの諸国の郡に俘囚郷・夷俘郷の郷名がみえることから俘囚の移配がほぼ全国に亘って行われたことがわかる。

ところで、東国から柵戸として東北地方の城柵地帯に強制移住させられた人々の考古学的研究は、東北地方の城柵地帯から見つかる関東型竈や関東系土師器と在り系土器などの遺構・遺物との比較検討を通して、柵戸として送り込まれた人々の原住地と移配地の特定や、関東系土師器を主体とする集落と城柵造営との関係など、律令国家の多様な対蝦夷政策が文献史料に現れる以前の7世紀後半代まで遡ることなどが具体的に明らかになりつつある。

ここでいう東北地方の在り系土器とは、杯・碗などの食膳具の内面をヘラミガキしたのち、燻して黒色処理しているものを指し、また関東系土師器とは、同じく食膳具の内面をナデ調整で仕上げ、色調は赤～黄褐色を呈するなど、両者には著しい相違点が認められる。

これに対して先の文献史料にもあるように多くの俘囚の移配先ともなった西海道、南海道諸国における彼らの足跡についての考古学的研究は少ない<sup>1)</sup>。それは西日本において東北地方の在り系土器、すなわち東北系土器が出土することが稀であるためかも知れないが、小田和利氏は、瀬戸内海の周防灘に面した福岡県京都郡苅田町の8世紀後半の黒添・赤木遺跡の竪穴住居と出土した土器が東北系とみられることから「国家的施策により強制移住させられた俘囚の小規模集落」と推測し、その土器様相、住居形態の類似から宮城県名取市清水遺跡の住居跡との類似性を指摘し、『続日本紀』宝亀七年の九月・十一月条にみえる移配記事との関連を推測している<sup>2)</sup>。

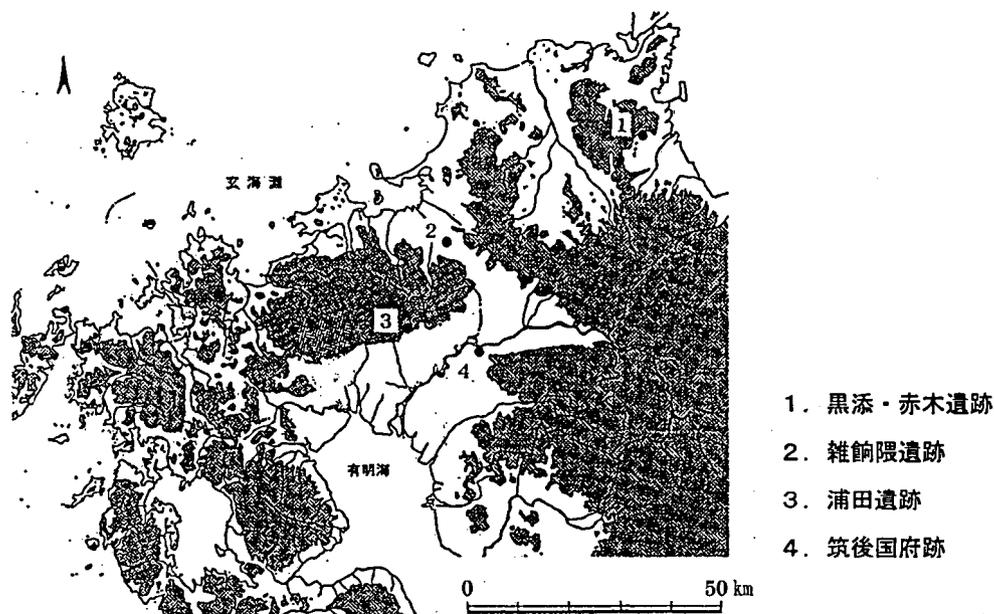


図1 遺跡位置図

筆者も筑後国府跡の発掘調査に携わるなかで、I期国府（7世紀末～8世紀前半）に伴う遺構から出土した土器の中に黒色土器が含まれていることに気づき、それらの類似資料を追う過程で北部九州のいくつかの遺跡の中に、内面を黒色処理した東北系土器を伴い、東北の住居形態と類似する特徴を持つ竪穴住居で構成される奈良・平安時代の遺跡が存在することが判明した。

そこで本稿では、まず、移配俘囚の集落の可能性を指摘される黒添・赤木遺跡<sup>3)</sup>を概観し、新たに東北系の集落と考えられる福岡市の雑餉隈遺跡<sup>4)</sup>、佐賀県神埼市の浦田遺跡<sup>5)</sup>、福岡県久留米市の筑後国府跡<sup>6)</sup>の事例を取り上げ、西海道における東北系集落の特徴を検討し、東北系集落と移配された俘囚との関連を考えてみたい。

## 1. 豊前における俘囚集落

### 黒添・赤木遺跡（図2～6、表1）

この遺跡は、小田和利氏が竪穴住居の形態と出土した土器の土器様相から国家的施策により強制移住させられた俘囚の小規模集落とする遺跡である。福岡県京都郡苅田町黒添字赤木に位置する。遺跡は周防灘を望む京都平野の北西部、貫山山系から東方に派生した低丘陵の最先端部に位置する。この丘陵の最高位は標高約30mであるが、遺跡の位置する地点は標高約12mで、東側の沖積面との比高差は約50cmと殆んど認められない。弥生時代終末（2号）及び古墳時代中期の竪穴住居（8号）各1軒とともに、奈良時代後半の竪穴住居6軒などが検出されている。

検出された奈良時代の竪穴住居6軒は、未調査区にかかる1号住居を除き、すべて平面プランが方形を呈し、北辺、または北西辺に貼り付けの竈を持ち、いずれも1.0～1.55mという長煙道を付設という共通点が認められる。また、竪穴住居は床面積により、大型の3号住居（38m<sup>2</sup>）、中型の5号住居（21m<sup>2</sup>）、小型の6・7・9号住居（10～16m<sup>2</sup>）、超小型の2号土壇（5m<sup>2</sup>）に大別できる。

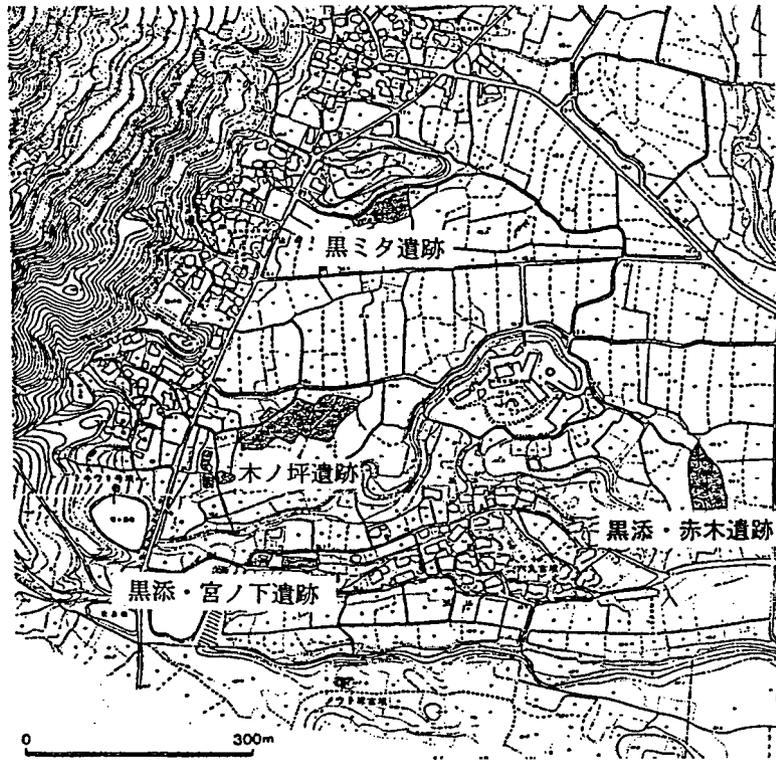


图2 黒添・赤木遺跡周辺地形図 (1/100)

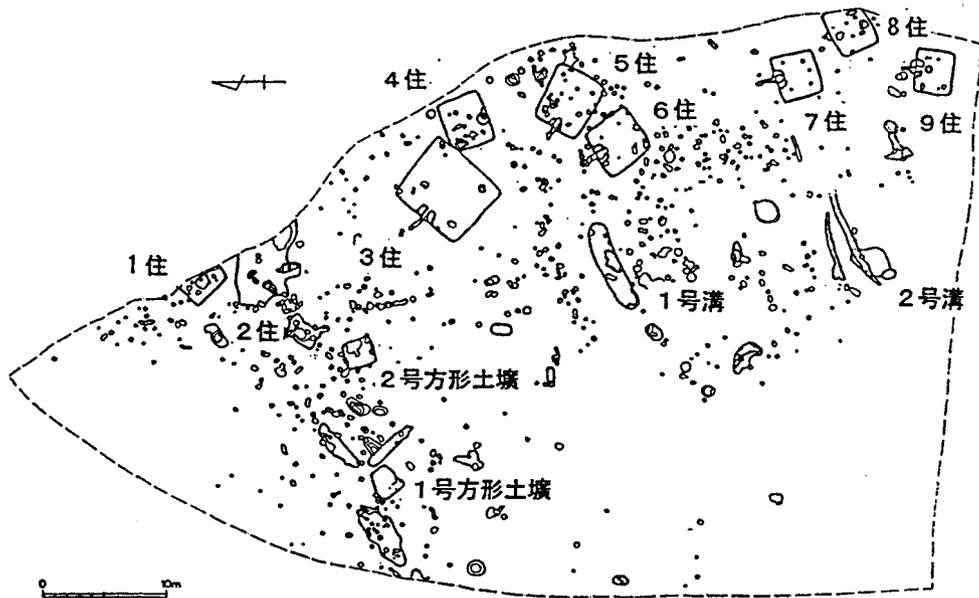


图3 黒添・赤木遺跡遺構配置図 (1/600)

表1 黒添・赤木遺跡歴史時代竪穴住居跡一覧

住居No	形状	床面積(m <sup>2</sup> )	支柱穴(本)	竈位置	竈構築方法	煙道	黒色土器	東北系土師器
1号	—	—	2(4)	—	—	—	—	甕
3号	方形	38	4	北西辺	貼り付け	長煙道	杯・椀	
5号	縦長	21	4	北西辺	貼り付け	長煙道	椀	
6号	方形	16	4	北西辺	貼り付け	長煙道	杯・壺	甕
7号	方形	12	4	北辺	貼り付け	長煙道		甕
9号	方形	10	3(4)	北辺	貼り付け	長煙道		
2号土壇	方形	5	—	—	—	—	椀	甕

### 1号住居跡(図4)

調査区の最北端で検出された住居跡で、その大半が調査区域外のため、全体の形態、規模は不詳であるが、残存する西辺の規模から方3.5mの床面積12m<sup>2</sup>程の住居と推定される。竈は北辺に設け、支柱穴は4本と推定される。出土した土師器甕(1)は器壁が5mmと薄く、形態から長胴気味の胴部に平底が付くとみられる。内外面ともに薄橙褐色を呈し、粘度紐による輪積み痕を残す。薄手、胴長、平底、輪積み痕跡等はいずれも奈良時代の東北地方の土師器に特徴的なものである。

### 3号住居跡(図4)

調査区の東辺北寄りに位置する。検出された竪穴住居の中で床面積は約38m<sup>2</sup>と、最大の規模を持つ。須恵器(杯・皿)、土師器甕、黒色土器A類(杯1・椀2)などとともに鉄鎌が出土。甕には器壁が薄手で、長胴をなし、色調が橙褐色、胎土に金雲母を含む一群(9~13)と、器壁が厚く、胴部下半が下膨れ状に大きく張って最大径を持ち、丸底の底部を有するもの(14)との2つのタイプが認められる。さらに前者には口唇部を面取りするもの(11・12)と丸く納めるもの(9・10・13)があり、12は上げ底の底部に葉脈圧痕を有する。黒色土器A類はいずれも薄橙褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。黒色土器杯(5)は丸みを持ち内面は指頭による成形、外面はヘラケズリを施す。同じく椀(6・7)はいずれも平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つが、6は外・底面ともヘラケズリで、上半部はその後にナデ調整を施し、7は外面ヘラケズリのあと、底部はミガキを施し、内底面はいずれもヘラミガキで上半は横ナデ調整を施す。

### 5号住居跡(図4)

煙道は燃焼部との仕切りを一段高くして煙出しから流入する雨水などを防ぐ工夫がみられる。土師器(杯・皿・甕)、黒色土器A類(椀)などが出土。土師器杯(18)は外面にヘラミガキを施す。甕(22)は口縁部が「く」の字状に短く外反し、胴部は筒状をなして平底気味の底部に移行する。最大径は口縁部にある。黒色土器椀(20)は高台を有し、外面は縦方向のミガキ、内面はヘラミガキで器面を整え、燻して黒色処理を施す。

### 6号住居跡(図5)

東辺の南寄りには入口とみられる平坦面を設ける。土師器(皿・杯・鉢・甕)、須恵器(蓋・杯・皿)、黒色土器A類(杯・壺)などが出土。鉢(31)は内面にミガキを施す。甕は器壁が薄く、底部が平底で葉脈痕を残すもの(32)と、器壁が厚く、丸底で胴部下半に最大径があるもの(33~35)との

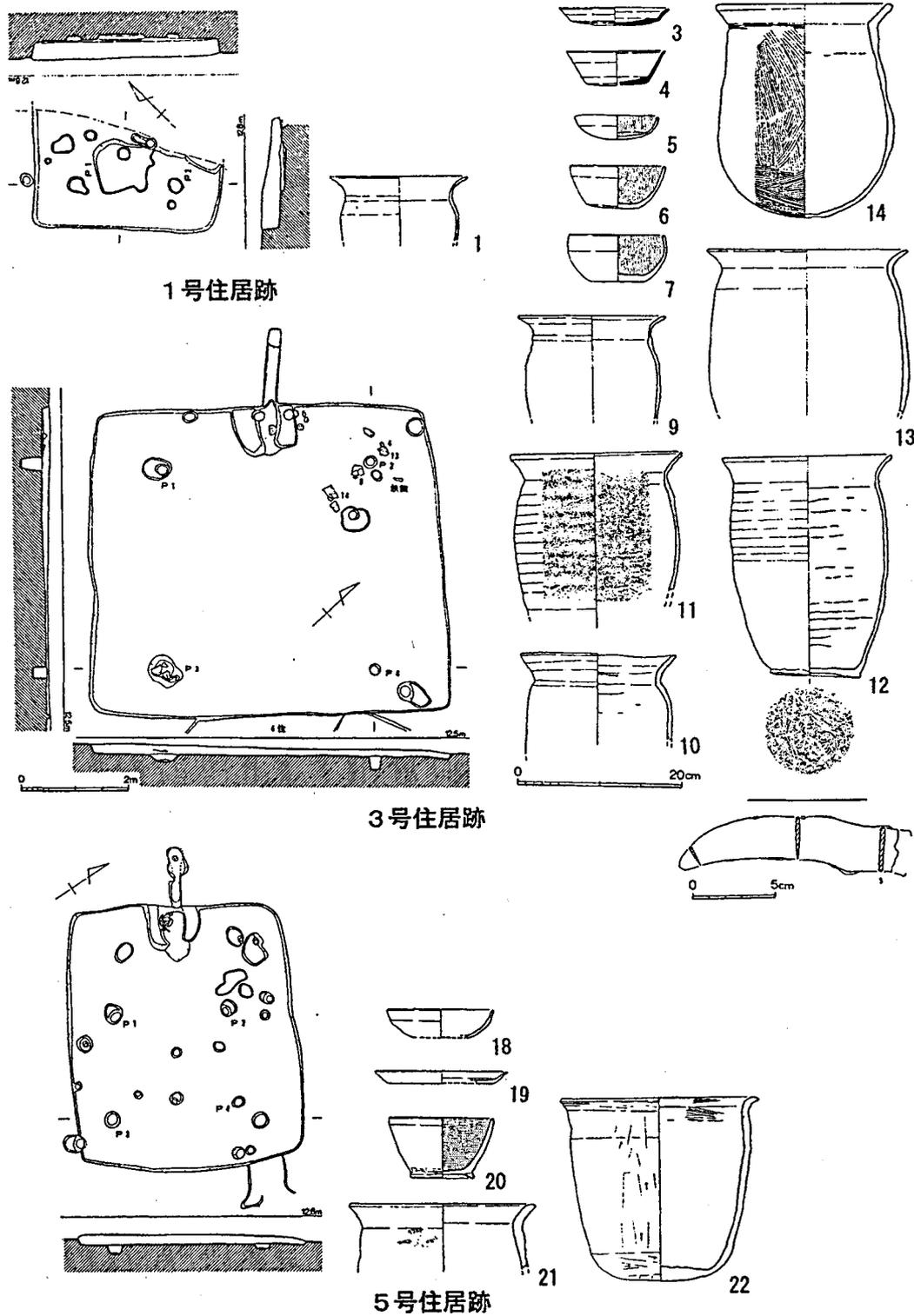
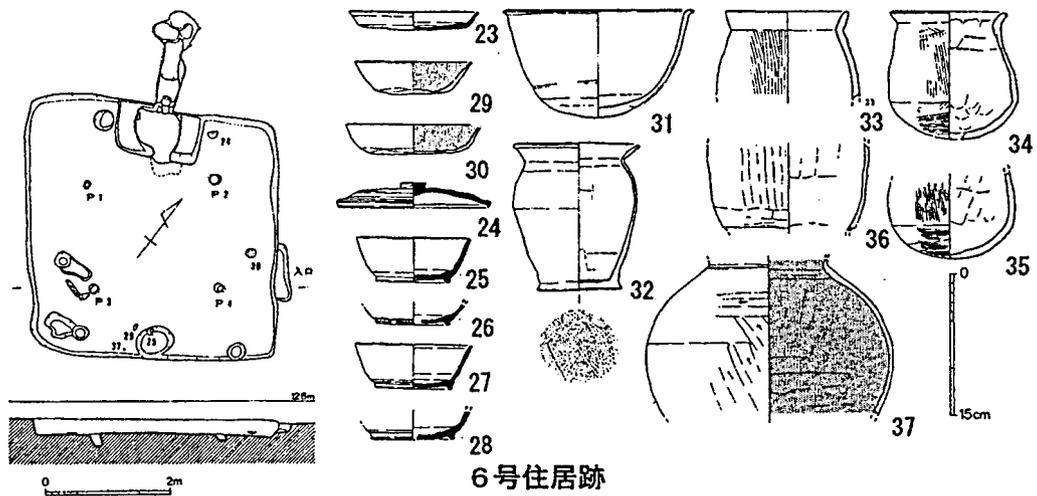
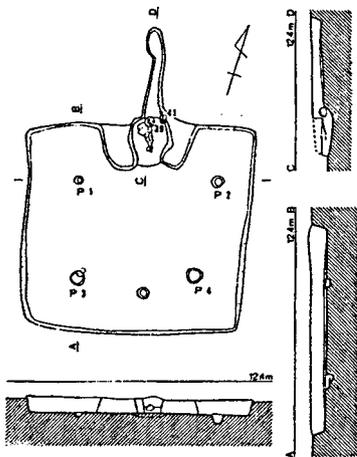


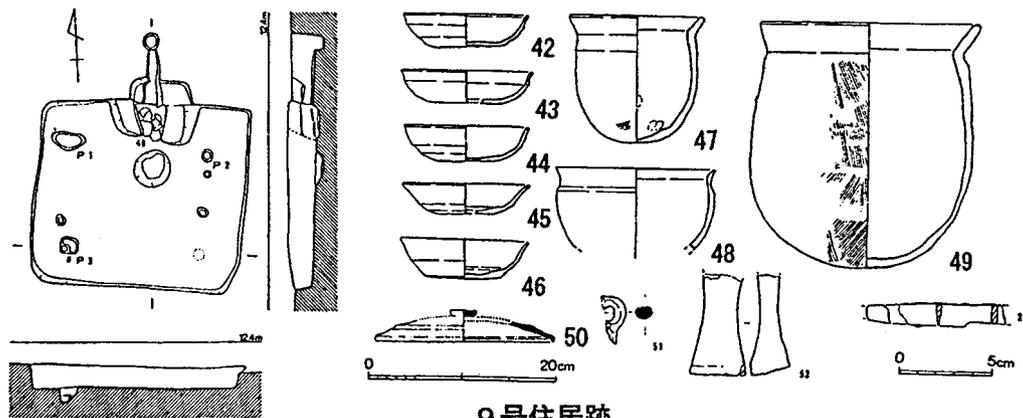
图4 黑添・赤木遺跡住居跡出土遺物① (遺構 1/120、遺物 1/8 : 1/4)



6号住居跡



7号住居跡



9号住居跡

图5 黒添・赤木遺跡住居跡出土遺物②(遺構1/120、遺物1/8:1/4)

2タイプが認められる。黒色土器杯(29・30)は外面へラケズリ、内面はへらミガキを施し、黒色処理を行う。また同じく壺(37)は球形胴をなして、器壁は薄く、内外面をへラケズリした後、内面はへらミガキを施して燻して黒色処理をする。輪積み痕が明瞭である。

7号住居(図5)

調査区の南辺東寄りに位置する。出土した土器はいずれも土師器で、砂流を含まない精選された胎土の球形胴の壺(38)、下膨れの甕(39)、外面を面取り状にへラケズリして内底にへらミガキを施した薄手・平底の甕(41)などが出土。40も平底をなす小型の甕である。壺(38)は1・3・6・9号住居などの薄手作りの甕と成形、胎土、色調などが類似する。

9号住居跡(図5)

竈に接してする煙道口の両側に平坦面が存在することから壁を切り込む「張り出し」竈と推定されたが、燃焼部は北壁内にはなく、煙道下半部も北壁ラインまで延びて燃焼部に連続することから、平坦面はこの住居に関係ない後世の掘り込みの重複とおもわれ、壁面に貼り付く「貼り付け」竈と判断した。支柱穴は本来、4本であろう。土師器(杯・鉢・甕)、須恵器(蓋・瓶把手)、鉄製刀子、砥石(泥岩製)が出土。鉢(48)は口縁部が軽く外反し、器高の低い鉢で、外面はへラケズリとみられる。

1号方形土壌(図6)

2.5m×2.1mの不整形気味の土壌で、底面は平坦をなす。土師器(椀・甕)が出土。椀(62)は

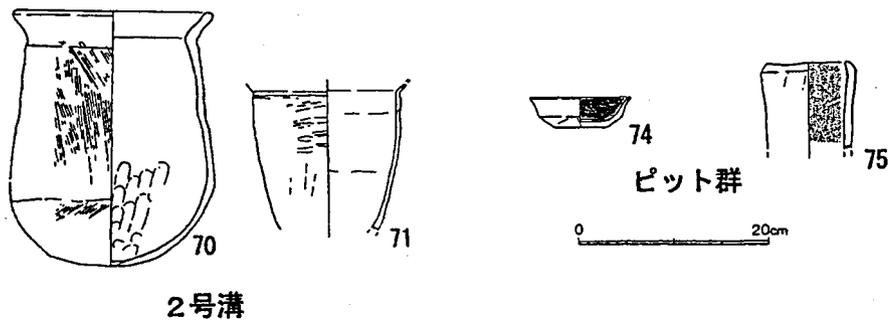
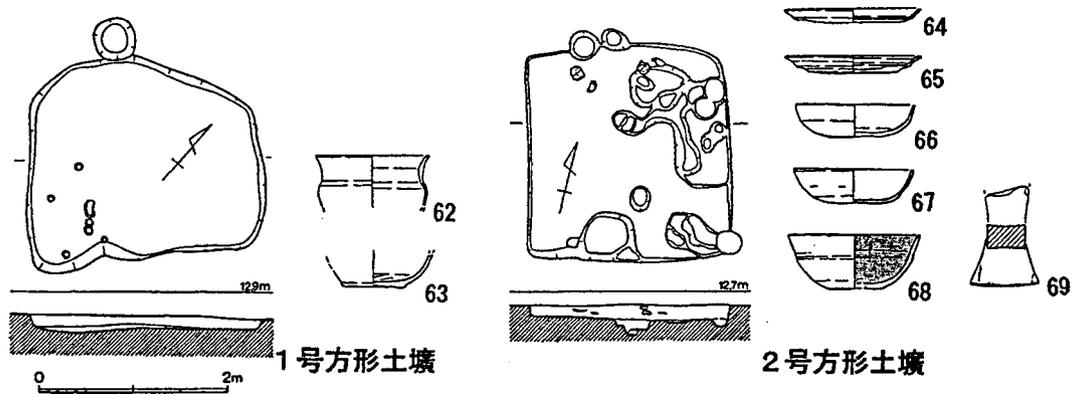


図6 黒添・赤木遺跡住居跡出土遺物③(遺構1/120、遺物1/8)

体部から口縁部に反転し立ち上がる。おそらく平底と考えられる。甕(63)は器壁が薄く、長胴甕の底部で、平底をなすなど東北地方の土師器甕の特徴を有する。

#### 2号方形土壇(図6)

2.15m×2.35mの方形を呈し、床面積は約5㎡。壁高は約20cmで、床面はほぼ平坦である。報告書では、方形土壇とされているが、後述する佐賀県浦田遺跡では同形、同規模で、竈を付設した住居例(SB019・042)があることから、本例も住居である可能性が考えられる。土師器(皿・杯)、泥岩製砥石、黒色土器A類(椀)などが出土。杯(66・67)はともに内湾して立ち上がり、内面にヘラミガキを施す。椀(68)は平底から内湾気味に立ち上がり、体部上部で小さく反転し外反する。外面は一部ヘラケズリ、内面はヘラミガキを施し、黒色処理を行う。

#### 2号溝(図6)

調査区の南端近く、7号住居跡の西方にある東西溝で、深さ10cm内外の浅い溝である。最大径が胴部下半にある丸底の下膨れの土師器甕(70)と、器壁が薄く、輪積み痕が残る長胴甕(71)が出土。

#### ピット群(図6)

P12から黒色土器A(杯)が出土。杯(74)は体部下半寄りに反転して外反する明瞭な稜を有する。外面ヘラケズリ、内面はヘラミガキを施す。他に出土地点の記述はないが、製塩土器(75)が出土。

以上のように黒添・赤木遺跡集落は、台地東端部に営まれた6軒の竪穴住居で構成された集落跡で、一軒の大型住居を中心にしてその周辺に数軒の中～小型の住居が伴うという集落形態をとる。これらの住居は、平面形が方形を呈し、北辺～北西辺に貼り付けによる竈を設けて長い煙道を付設し、4本柱構造を採用するという特徴がみられる。こうした東北系竪穴住居の特徴を持つ大半の竪穴住居から在地産の土師器・須恵器に伴って、内面を黒色処理したA類の黒色土器や、薄手・長胴・平底で、底部に葉脈痕のある土師器甕など東北地方の土器様相に類似する特徴を持つ土器が出土する。出土土器から8世紀中～同後半に比定されている。

九州では奈良時代になると竪穴住居は「張り出し」の竈を持ち、煙道は短く、あるいは直接燃焼部から直接煙出しに続き、支柱穴は持たない例が主流を占めるのに対し、黒添・赤木遺跡の竪穴住居は大半が4本柱構造で、北辺または北西辺の中央に「貼り付け」による竈を付設して長煙道を伴うという東北地方の住居の特徴が認められる。

## 2. 筑前の東北系集落

### 雑餉隈遺跡(図7～9、表2)

遺跡は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある丘陵上に位置する。付近は市街化が著しく、旧地形を伺うことは困難であるが、多くの開析谷が入り込み、いくつかの小さな低丘陵が形成され、それらの丘陵上には8世紀～9世紀にかけての竪穴住居を主体とする遺跡が多数所在する。

その一つである雑餉隈遺跡では古代の主な遺構として、竪穴住居跡58軒、掘立柱建物7棟、土壇52、井戸2基、溝2条などが確認されている。竪穴住居は、8世紀半ばから後半を主体とする時期に営まれたもので、あまり重複することなく展開する。また、それらの住居は建物の方向性の違いから大きく3群に分別され、そのすべての群にわたって、計8軒の竪穴住居、及び土壇1基から黒色土器A類や、器壁が薄手で、長胴・平底をなすとみられる土師器甕など、東北地方の土器様相と住居形態に類



凡例

黒塗り……古代の住居で東北系土器を持つもの

斜線……古代の竪穴住居・土境

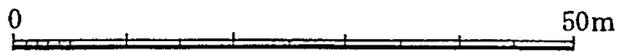


図7 雑餉隈遺跡遺構配置図

表2 雑餉隈遺跡古代竪穴住居跡一覧

住居No	形状	床面積(m <sup>2</sup> )	支柱穴(本)	竈位置	竈構築方法	煙道	黒色土器	東北系土師器
26号	方形	30	4	北辺2	貼り付け	長煙道	杯	—
35号	方形	8	—	北辺	貼り付け	長煙道	壺	
53号	方形	12	—	東辺	張り出し	—		甕
55号	横長	11	—	東辺2	張り出し	短煙道		(鉢)
63号	横長	15	—	北辺	貼り付け	長煙道	杯	
70号	縦長	22	—	北辺	張り出し	長煙道		甕
100号	方形	10	—	北辺	張り出し	長煙道	杯	
114号	横長	23	3(4)	北3東2	貼り付け	長煙道	椀	

似する特徴を持つ竪穴住居と土壌の概要について記述する。

**住居跡26 (図8)**

床面積は約30m<sup>2</sup>の大型方形住居で、唯一、明確に支柱穴4本を有する。北辺に付設された竈はのちに東側に作り替えられる。いずれも貼り付け構造で、長煙道が付く。須恵器(蓋・杯・皿)、土師器(蓋・甕)などととも、内面がヘラミガキで、黒色処理を施した黒色土器A類杯(141)が出土している。

**住居跡35 (図8)**

床面積は約8m<sup>2</sup>と、小規模な住居である。北辺に貼り付けの竈を付設し、長煙道を伴う。支柱穴は未検出。須恵器(長頸壺・杯)、土師器(甕)、黒色土器A類(壺)などが出土。黒色土器壺(181)は平底で、内面はヘラミガキのあと、黒色処理を施す。

**住居跡53 (図8)**

床面積が約12m<sup>2</sup>の住居で、竈は東辺に張り出し部を設けて付設する。煙道の有無は不詳。支柱穴は未検出。住居址54を切り込む。須恵器(蓋・杯)、土師器(高坏・甕)が出土。甕は器壁の厚いもの(239)と、肩に段を有し、薄くて長胴なもの(236)との2タイプが認められる。

**住居跡55 (図9)**

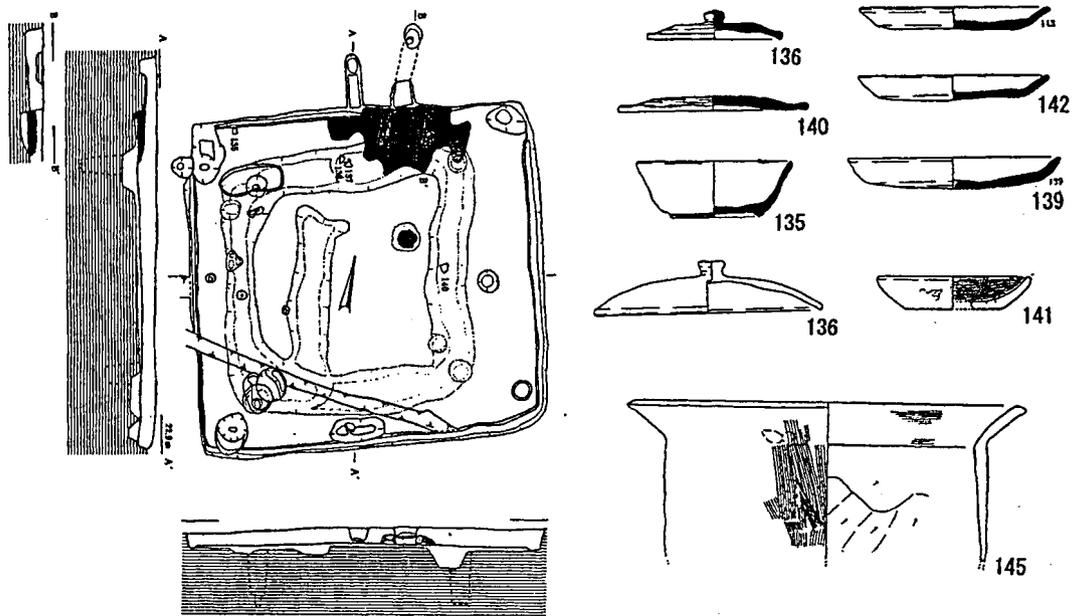
横長の長方形を呈し、床面積は約11m<sup>2</sup>を測る。壁高は約45cmで遺存は良好。東辺中央やや北寄りに張り出しの竈を設け、ごく短い煙道を付設する。この竈の南側にも古い竈跡と考えられる張り出し部がある。支柱穴は未検出。須恵器(蓋・杯・高坏)、土師器(鉢・甕)が出土。鉢(248)は直に立ち上がる体部を持ち、口縁はわずかに外反する。底部は平底をなし、手持ちのヘラケズリによる成形で、内面は目の粗いハケメを施す。稀な器形・調整のために取り上げたが、在地産の可能性もある。

**住居跡63 (図9)**

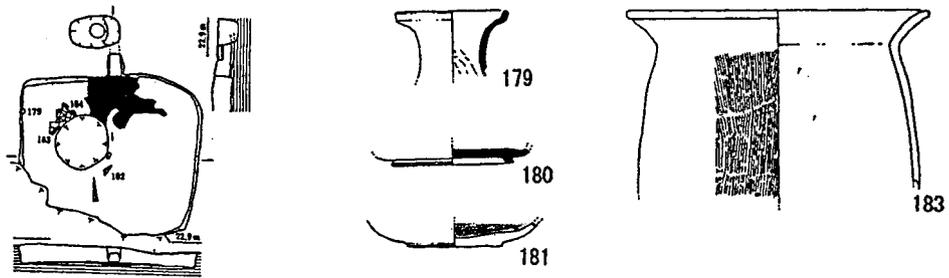
やや横長の長方形を呈し、床面積は約15m<sup>2</sup>。壁高は30~40cmで遺存は比較的良好。支柱穴は未検出。竈は、北辺に貼り付けて、長煙道を付設する。支柱穴は認められない。須恵器(杯・皿)、土師器(杯・甕)、黒色土器A(杯)が出土。杯(279・284)は内面ヘラミガキ、外面はナデ調整を施す。

**住居跡70 (図9)**

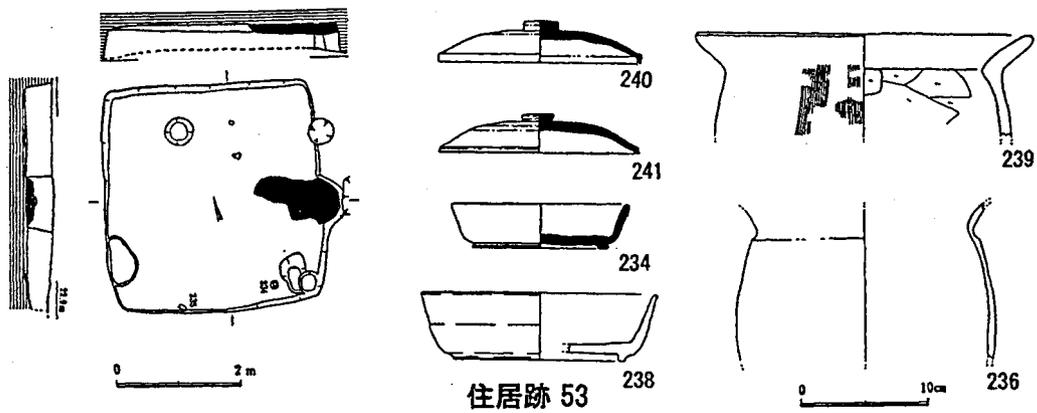
やや縦長の方形を呈し、住居跡71を切る。北辺に設けられた竈は破砕されている。須恵器(蓋・杯)、土師器(甕)が出土した。甕(307)は器壁が薄く、長胴である。おそらく平底と考えられる。



住居跡 26



住居跡 35



住居跡 53

図8 雑餉隈遺跡竪穴住居跡出土遺物① (遺構 1/120、遺物 1/6)

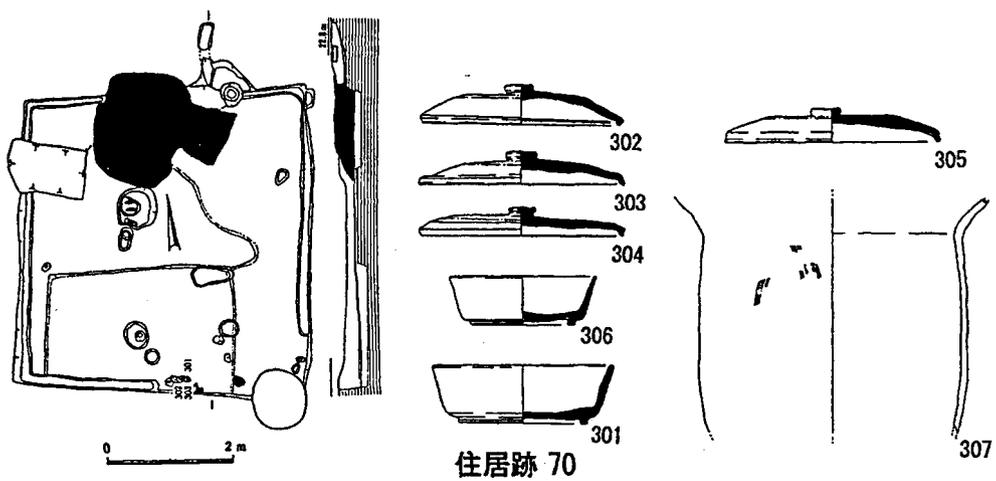
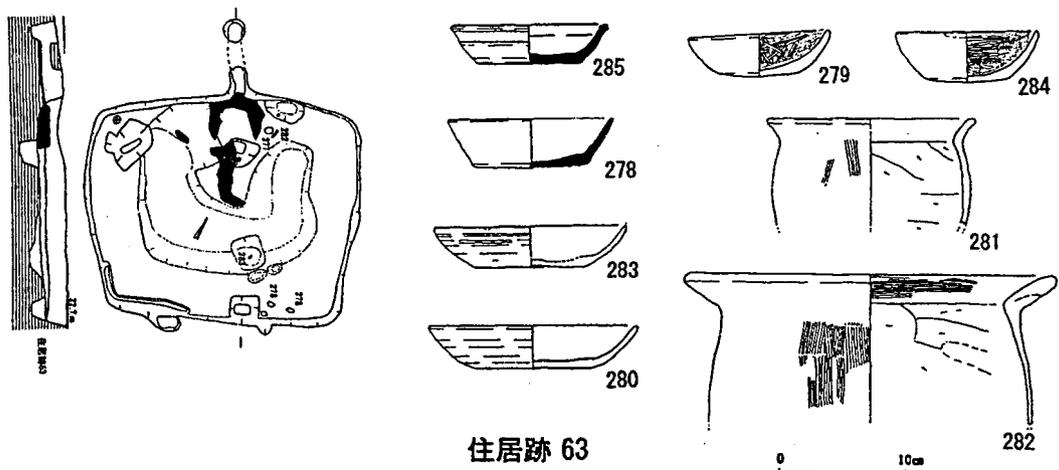
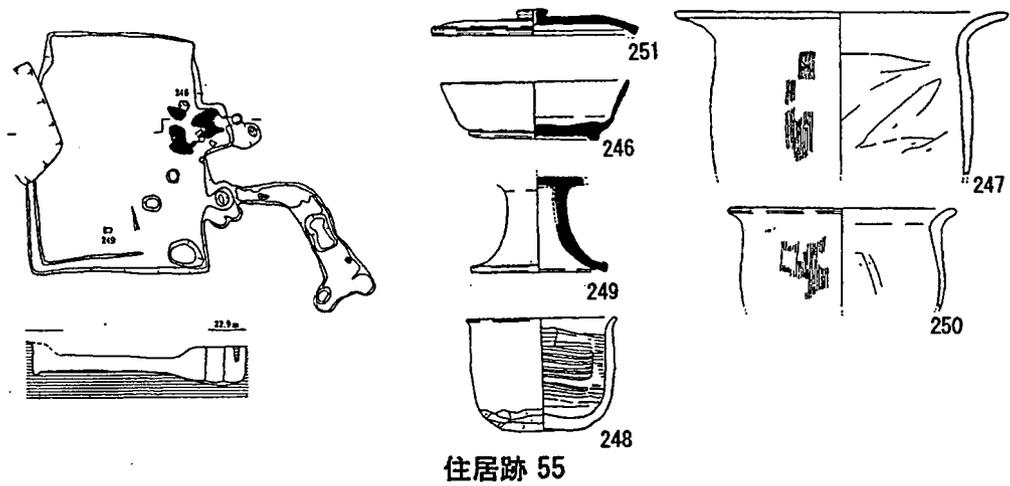
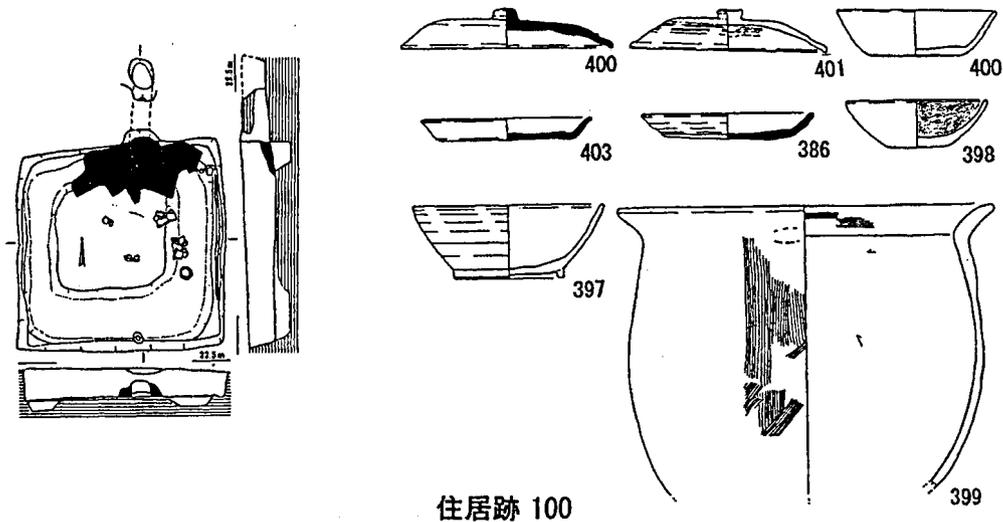
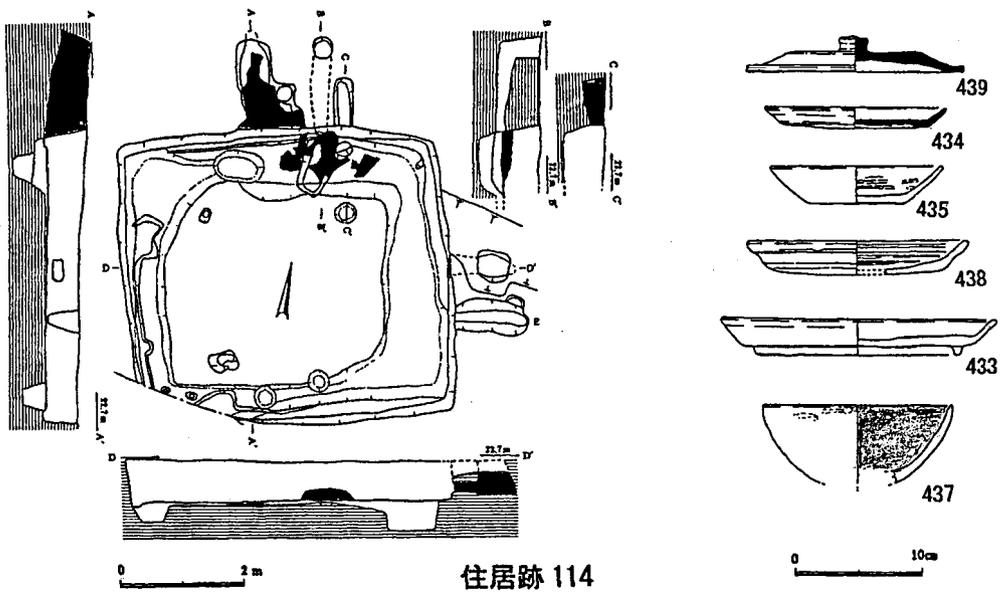


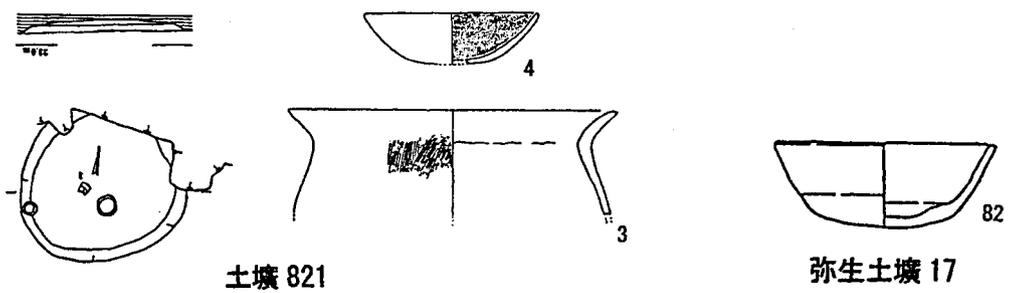
図9 雑餉隈遺跡竪穴住居跡出土遺物②(遺構1/120、遺物1/6)



住居跡 100



住居跡 114



土坑 821

弥生土坑 17

图10 雑餉隈遺跡竖穴住居跡出土遺物③ (遺構 1/120、遺物 1/6)

#### 住居跡100 (図10)

一辺3.2m程の方形を呈し、壁高は約50cmを測る。主柱穴は認められない。竈は北辺に付設されるが、わずかに壁を切り込んで構築されている。煙道は1.3mの長さを有する。土師器(蓋・椀・甕)、須恵器(蓋・杯・皿)とともに黒色土器A(杯)が出土。

#### 住居跡114 (図10)

やや横長の方形を呈する住居で、壁高は60cmと遺存状態は比較的良好である。床面から主柱穴とみられる3か所のピットが検出されているが、本来は4本構造と推定される。竈は北辺に3か所(A・B・C)、東辺に2か所(D・E)認められ、いずれも張り出し部を設けず、壁に貼り付けて付設する。またいずれの竈も長煙道を持ち、長さ1.4m(A)、1.5m(B)、70cm(C)、1.0m(D)、1.2m(E)を測る。須恵器(蓋・皿)、土師器(高台付皿・杯・皿)、黒色土器A(椀)などが出土した。土師器杯(435)は内面にヘラミガキを施す。また皿(438)は内外面にミガキを施し、焼成も極めて堅緻な精製品である。黒色土器椀(437)は内面から口縁端部外面にかけてヘラミガキを施す。

#### 土壇821 (図10)

径2.6mほどの円形を呈し、在地の土師器甕(3)とともに黒色土器A(椀)が出土した。椀(4)は、内面がヘラミガキとみられるが、磨滅が著しい。

その他に弥生時代前期後半の土壇17から出土したとする土師器椀(図10・82)がある。82は明赤褐色を呈する精製品で、体部に回転ナデを施す。陸奥国の内面黒色処理土器椀の形態に類似する。報告書に図示された土壇17の平面実測図は、形態的に異なる二つの遺構が重複しているように見える。

以上、雑餉隈遺跡の竅穴住居58軒は、台地あまり重複することなく展開し、出土遺物や、重複する例が少ないことから8世紀前半から同後半頃に継続して営まれたものと考えられる。その中で住居8軒(住居跡55は在地の住居である可能性がある。この場合は7軒となる)、土壇1基から東北系土器と類似する特徴を持つ土器が出土した。この8軒の住居は平面形が横長や縦長気味の例も認められるが、基本形は略方形を呈する。また床面積により8㎡未満(35号)、10~15㎡(53・55・63・100号)、22~23㎡(70・114号)、30㎡(26号)の4群に分類できる。主柱穴は規模の大きい26、114号を除き、認められない。竈の構造は53・55号住居の2軒が東辺に張り出しの竈を設け、短い煙道を伴う(53は不明)が、残り6軒はすべて北辺に貼り付け竈(造り替えの場合は当初の竈)を付設し、長煙道を伴うという特徴を持つ。単辺(26・55号)、あるいは2辺に複数の竈を有する例(114号)もある。

また、本遺跡では、黒色土器A類として住居跡26・63・100号から杯が、住居跡114号・土壇821から椀が、住居跡35号から壺が出土し、東北系と考えられる器壁が薄手で長胴気味の、頸部に段の痕跡が残る土師器甕が住居跡53・70号から出土している。

また弥生時代の土壇17から出土したとされる土師器椀(82)は形態的に東北地方の内面を黒色処理土器の椀に類似する。なお、雑餉隈遺跡では東北系土器は伴出しないが、住居様相(北辺に貼り付け竈、長煙道を有する)が東北のそれに類似する構造をもつ住居がさらに数軒存在する。

### 3. 肥前の東北系集落

浦田遺跡 (図11~15・表3)

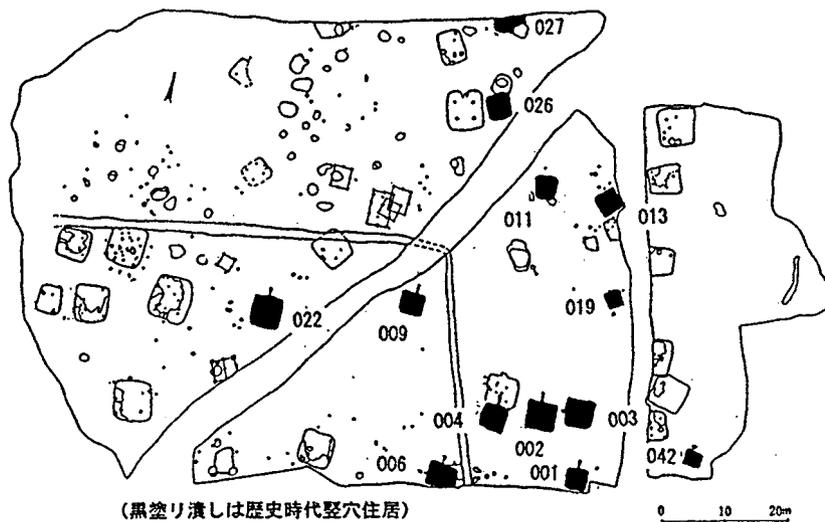


図11 浦田遺跡構配置図

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津に位置する。遺跡は脊振山系から南麓から南方の平野部に向かって延びる志波屋・吉野ヶ里段丘の基部にある権現山南斜面の舌状丘陵の標高39~42mに位置し、遺跡の西南1.5kmには『肥前国風土記』神埼郡条にみえる「烽壺所」の比定地とされる日隈山烽跡が位置する。

浦田遺跡では古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡35軒、掘立柱建物6棟、古墳2基、溝1条などが検出された。竪穴住居跡の中で古代の竪穴住居として報告された8軒(001、002、003、004、006、009、022、026)の他に、古墳時代の竪穴住居の中にも住居形態や土器様相から011、013、019、027、042の5軒も8世紀末~9世紀初頭と判断され、古代の竪穴住居は合計13軒となる。これらの竪穴住居の多くが長煙道を付設した貼り付け竈を持ち、黒色土器A類や、器壁が薄手で平底を呈する土師器甕を伴うなど、在地のものとは様相の異なる遺構、遺物で構成される。

#### S B001住居跡 (図12・13)

床面積が約10㎡の方形住居で、北辺に長煙道を有する貼り付け竈を付設する。支柱穴は不詳。土師器(蓋・杯・皿・碗・甕)、黒色土器A類(杯)が出土。甕(246)は薄手で、口縁部より滑らかに下方に延び、あまり胴は張らない。内面は横位のハケ目調整を行う。黒色土器杯(328・332)は内外面ともにヘラミガキで、332には底部に×印の浅い沈線のヘラ記号を持つ。

#### S B002住居跡 (図12・13)

床面積約20㎡の方形住居で、北辺に長煙道を持つ貼り付け竈を付設ける。隣接するS B003の煙出しのピットを切り込む。土師器(蓋・杯・皿・碗・甕)、黒色土器A類(杯)が出土する。黒色土器杯(331)は外面赤褐色を呈し、外面はヘラケズリの後にナデ調整、内面はヘラミガキの後、黒色処理を施す。

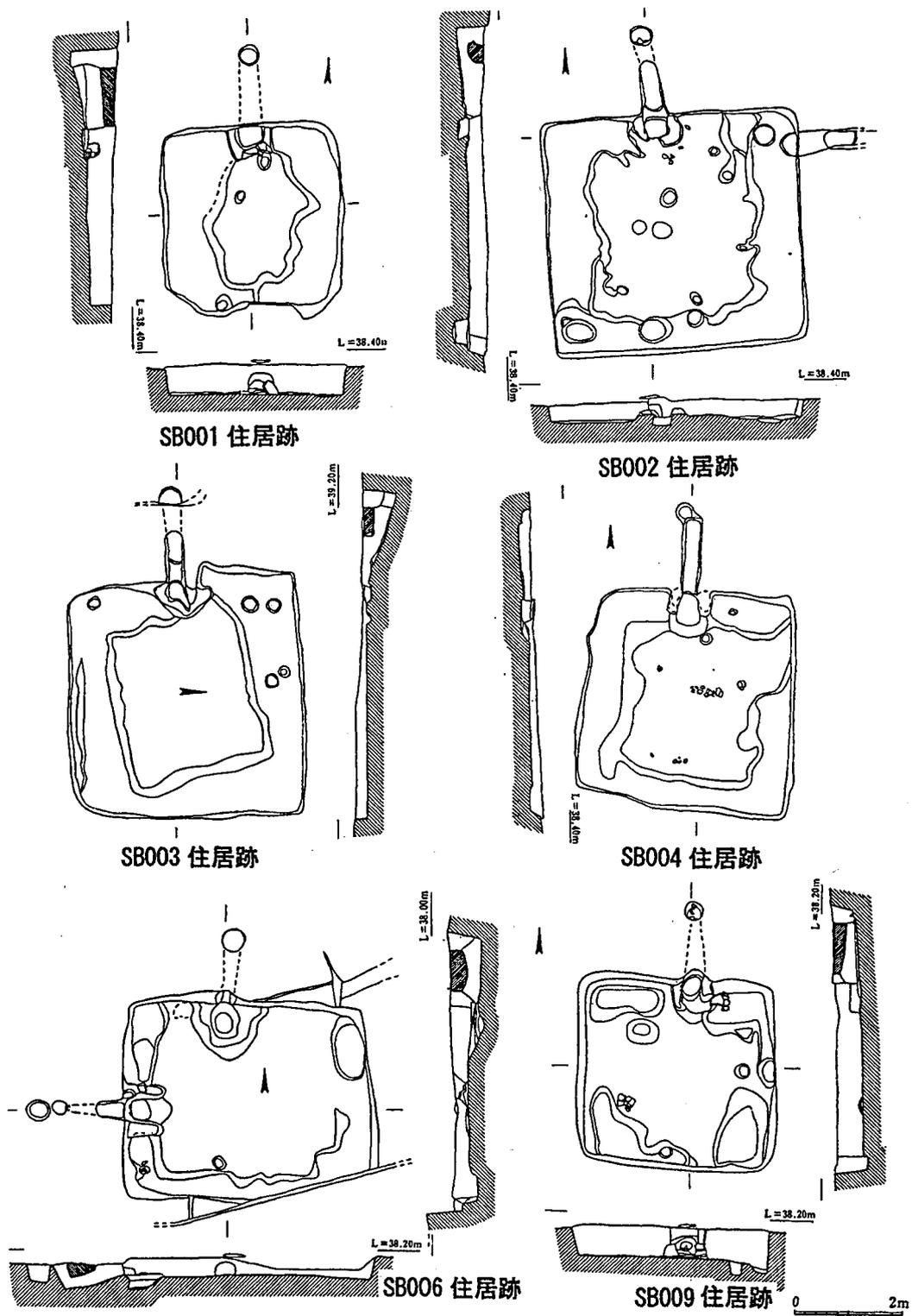
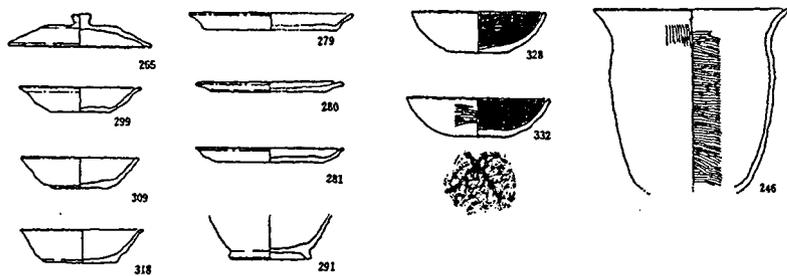
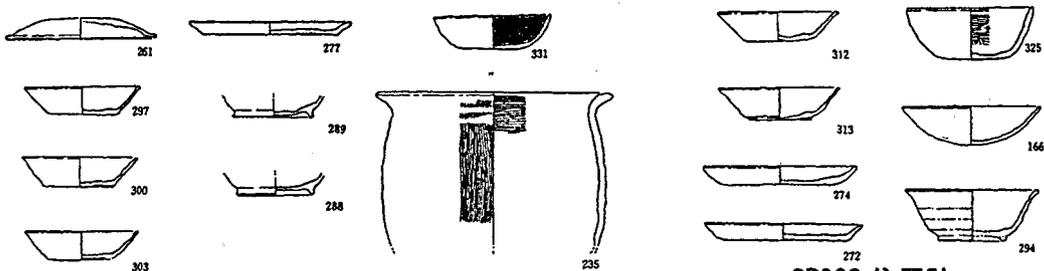


图12 浦田遺跡歴史時代竖穴住居跡① (1/120)

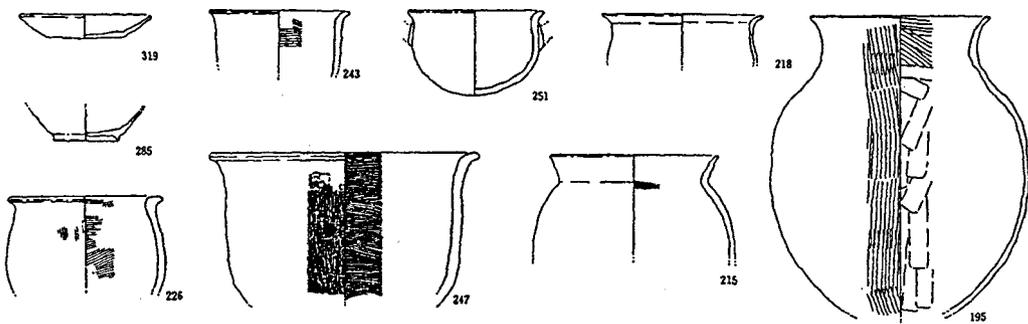


SB001 住居跡

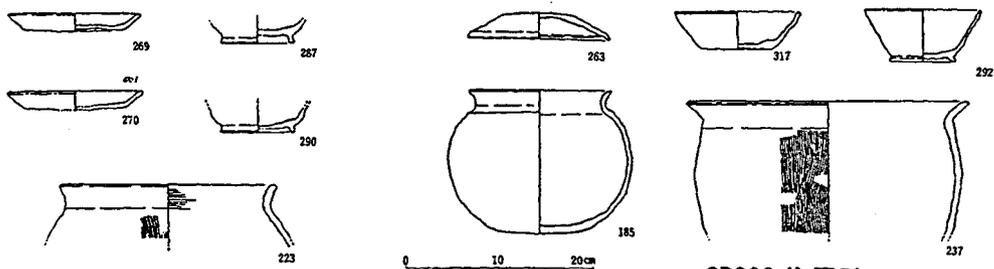


SB002 住居跡

SB003 住居跡



SB004 住居跡



SB006 住居跡

SB009 住居跡

図13 浦田遺跡出土遺物① (1/8)

### S B003住居跡 (図12・13)

床面積が約20㎡の方形住居で、西辺中央に急傾斜の長煙道を有する貼り付け竈を付設ける。竈より南半の西壁は屋内側に約40cm、前進した位置にあるが、削平を受けているために確証はないものの、この範囲に棚状施設が設けられていた可能性が考えられる。S B002に切り込まれる。土師器(杯・皿)などが出土。土師器杯(325)は深みがあり、内湾気味に立ち上がり、内面はヘラミガキを施す。黒色処理はされてないが、形態的に在地のものとなり、東北地方の内面黒色処理した土師器に似る。

### S B004住居跡 (図12・13)

床面積が約16㎡の方形住居で、竈は北辺中央の壁に長煙道を伴う貼り付竈を持つ。土師器(杯・甕・鉢・壺)などが出土。鉢(247)は、器壁が厚いが、内面にも横位のハケ目調整が認められ、底部は平底気味を呈するとみられる。壺(195)は短く外湾気味に外反する口縁部に丸味のある胴部を持つ大型品である。外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のヘラケズリを施す。在地産の可能性はある。

### S B006住居跡 (図12・13)

床面積が約18㎡の、長方形気味の住居である。主柱穴は不詳。竈は北・西辺の2個所に認められる。前者は竈本体が遺存せず、床面に浅い窪みと長さ1.1mの煙道を残すのみである。後者は竈と長煙道が遺存する。北辺から西辺への竈の造り替えであろう。土師器(皿、杯)、砥石が出土。

### S B009住居跡 (図12・13)

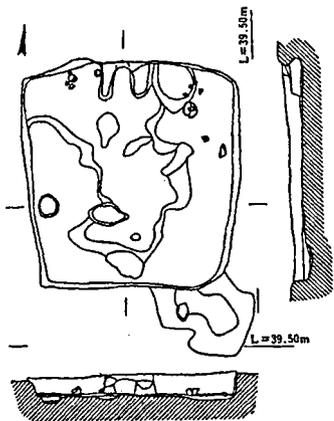
床面積13㎡の方形住居で、主柱穴は不詳。北辺に長煙道を持つ貼り付け竈を付設する。土師器(蓋・杯・壺・甕)が出土。壺(185)は平底気味の底部と球形をなす胴部を持ち、頸部から短く外反する。

### S B011住居跡 (図14・15)

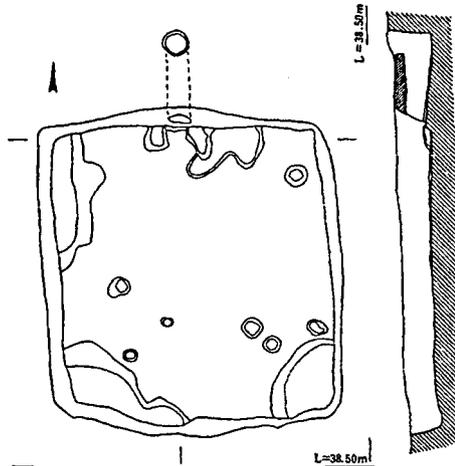
床面積が約12㎡の方形住居で、北辺に竈を付設。煙道は未確認。竈周辺の床面から土師器(蓋・杯・皿・甕)が出土。土師器杯(326)は深みがあり、内面にミガキを施す。形態的に在地のものとなり、東北地方の内面黒色処理土器の特徴を持つ。調査報告書では本住居の時期を6世紀とするが、遺構の平面形・規模、出土遺物の特徴から8世紀末～9世紀前半の所産と考える。

表3 浦田遺跡歴史時代竪穴住居跡一覧

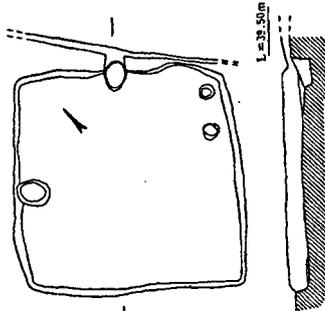
住居No	形状	床面積(㎡)	主柱穴(本)	竈位置	竈構築方法	煙道	黒色土器	東北系土師器
S B001	方形	10	—	北辺	貼り付け	長煙道	杯	甕
S B002	方形	20	—	北辺	貼り付け	長煙道	杯	
S B003	方形	20	—	西辺	貼り付け	長煙道		杯
S B004	方形	16	—	北辺	貼り付け	長煙道		甕・壺
S B006	横長	18	—	北→西	貼り付け	長煙道		
S B009	方形	13	—	北辺	張り出し	長煙道		
S B011	方形	12	—	北辺	貼り付け	—		杯
S B013	方形	13	—	北東辺	貼り付け	—		壺
S B019	方形	7	—	北辺	貼り付け	無		
S B022	方形	25	—	北辺	貼り付け	長煙道	杯	杯・甕・鉢
S B026	方形	18	—	—	—	—	杯・鉢	
S B027	(方形)	(26)	—	—	—	—		杯・甕
S B042	方形	6	—	北辺	貼り付け	無	杯	



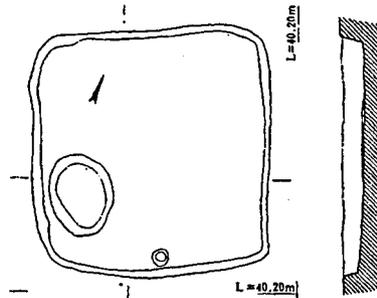
SB011 住居跡



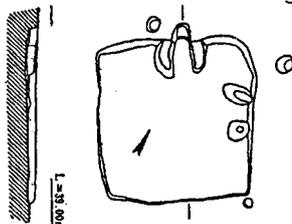
SB022 住居跡



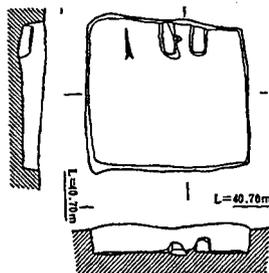
SB013 住居跡



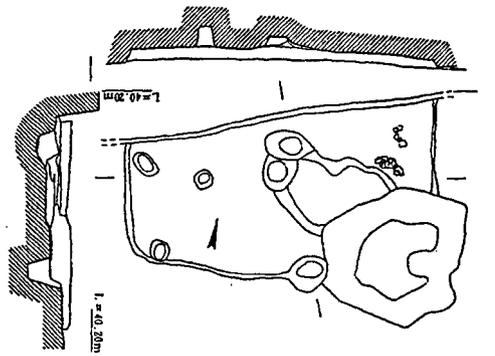
SB026 住居跡



SB019 住居跡



SB042 住居跡



SB027 住居跡

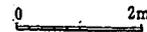
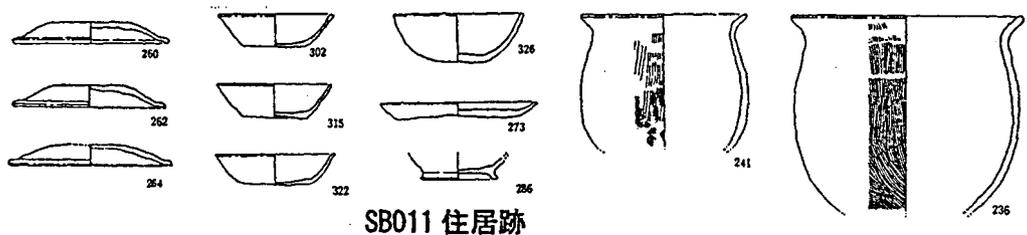
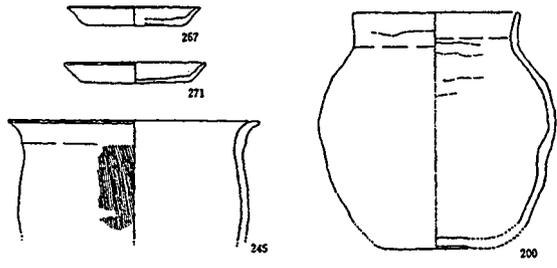


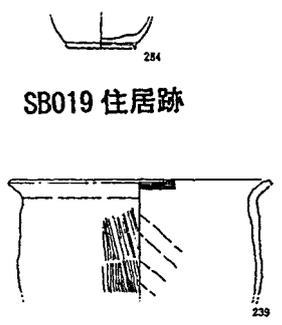
図14 浦田遺跡歴史時代竪穴住居跡② (1/120)



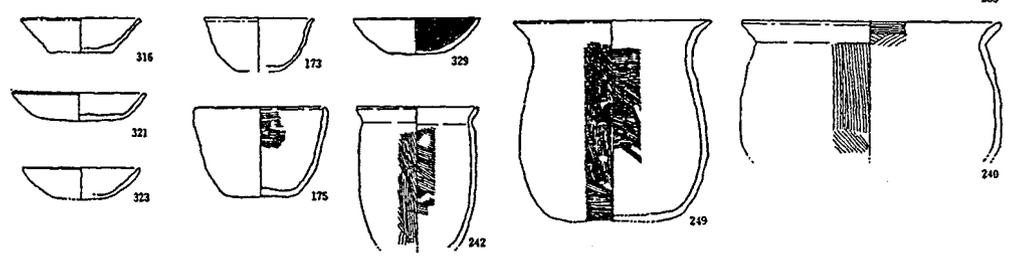
SB011 住居跡



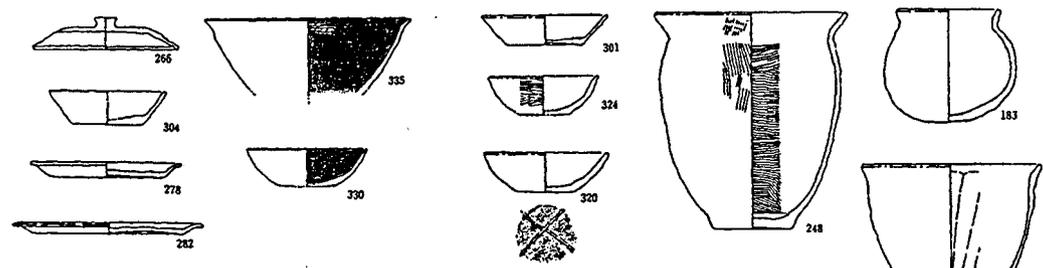
SB013 住居跡



SB019 住居跡



SB022 住居跡



SB026 住居跡

SB027 住居跡



SB042 住居跡



SB015 住居跡



SB016 住居跡

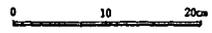


图15 浦田遺跡出土遺物② (1/8)

#### S B013住居跡 (図14・15)

床面積約13㎡の方形住居で、竈は未検出であるが、北東辺中央に竈の燃焼部の痕跡らしき窪みと、外から煙道と推定される溝が壁面沿いのピットに連なることから、このピットは煙道から燃焼部に雨水が流入するのを防ぐためのもので、北東辺に竈が存在した痕跡と考えられる。土師器(皿・甕)が出土。土師器甕(200)は直立気味のやや外反する口縁部にやや肩の張る球形胴部を持ち、平底をなす。内面はヘラケズリのあと、ヘラミガキを施す。形態的、技法的に在地性が薄い。調査担当者は本住居跡の時期を6世紀とするが、遺構の平面形、規模、出土遺物から古代の所産と考えられる。

#### S B019住居跡 (図14・15)

一辺2.5mの方形で、床面積は約7㎡と小型である。主柱穴は不詳。北西辺に貼り付け竈を付設し、煙出しを壁面から張り出して設ける。竈内から土師器杯が出土。報告は本住居を6世紀とするが、竈出土の土師器杯(284)や住居形態・規模などの特徴から8世紀後半～同末頃の所産と考える。

#### S B022住居跡 (図14・15)

床面積は約25㎡で、略方形を呈する。主柱穴は不詳。北辺に貼り付けの竈を付設し、長煙道を伴う。土師器(杯・鉢・甕)、黒色土器(杯)などが出土。土師器鉢には大小の2タイプがあり、小型の鉢(173)は、丸みを持つ平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部のみがナデ調整で、内外面ともにヘラミガキを施す。大型の鉢(175)は平底で、器壁が薄い。黒色土器杯(329)は、内面黒色で外面の一部も部分的に黒色化している。外面ヘラケズリのあとナデ調整、内面ヘラミガキを施す。土師器甕は小型で、器壁が薄く、長胴をなすもの(242)と、下膨らみの胴部に平底が付くもの(249)が認められる。いずれも内外面ともにハケ目調整を行う。

#### S B026住居跡 (図14・15)

床面積約18㎡の略方形を呈し、主柱穴・竈ともに認められない。土師器(蓋・杯・皿)、黒色土器A(杯・鉢)が出土。黒色土器鉢(335)は内湾気味に大きく開き、口縁部は短く外反する。色調は外面明褐色で一部が黒色、内面は黒色である。内外面ともにヘラミガキ調整を施す。また、黒色土器杯(330)は外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキを施す。色調は外面明褐色、内面黒色である。

#### S B027住居跡 (図14・15)

一部が調査区外の為、全体の形状、規模は不詳。土師器(杯・甕・甌)などが出土。杯にはやや上げ底気味の平底に直線的に開く体部を有するもの(301)と、内湾気味に立ち上がりもの(320・324)がある。324には体部外面に黒塗りの痕跡が、また320には丹塗りの痕跡が認められ、底面外面にはS B042の黒色土器(327)と同じ「×」印がある。いずれの杯も内外面ヘラミガキを施す。甕(248)は「く」の字形に小さく外反し、長胴で平底をなす。胴部内外面ともにハケ目調整を施す。

#### S B042住居跡 (図14・15)

略方形を呈し、床面積は約6㎡。主柱穴は未検出。北辺中央に白色粘質土で竈を構築する。土師器(皿)、黒色土器A(杯)が出土。黒色土器杯(327)は、平底に直線的な体部がつき、底部に×印のヘラ記号がある。口縁部がナデ調整、他は内外面ともにヘラミガキを施す。

そのほかに古墳時代のS B015住居跡とS B016住居跡から黒色土器A類の杯・椀(図15)が出土している。混入品であろう。

以上のように、浦田遺跡で検出された古代の集落は13軒の竪穴住居で構成され、丘陵東縁部に営ま

れ、1例を除き、ほとんど重複することがなく、出土した土器から8世紀末～9世紀初頭頃に営まれたものと考えられる。竪穴住居はその大半が方形を呈し、床面積から7㎡以下(S B019・042)、10～13㎡(S B001・009・011・013)、16～20㎡(S B002～004・006・026)、25㎡以上(S B22・027?)の4群に分けることができる。支柱穴を持つ住居は認められない。

竪穴住居13軒の中で竈を付設するのは11軒で、設置場所もS B003住居が西辺、残る10軒の大半は北辺(013は北東辺)に取り付け、S B006住居が西辺へ造り替えている。竈はすべてが貼り付けによるもので、長煙道を持つもの7軒(S B001～004、006、009、022)、燃焼部に煙出しのピットが隣接、又は短い煙道を有するもの2軒(S B013、019)、煙道を設けないもの1軒(S B042)で、長煙道を有する例が大半を占めるが、長煙道は床面積が10㎡以下の住居には付設されていない。

また、これら13軒の竪穴住居は、S B006・019住居を除く11軒から在地産の土師器とともに、黒色土器A類(杯・鉢)や、それらに類似する調整が認められる土師器杯・椀、東北系と考えられる薄手・長胴の平底土師器甕などが共伴する。またS B006住居は東北系土器の出土こそないが、住居様相としては方形を呈し、貼り付けカマド・長煙道を持つなど東北地方の住居の特徴を持つ。S B019住居は、前述した黒漆・赤木遺跡に竈こそ認められないが、同規模・同形態の土壇(2号)から黒色土器椀を伴う例があることから極小規模ながらも東北系集落を構成する遺構と考えられる。

#### 4. 筑後の事例

##### 筑後国府跡(図16・17)

筑後国府跡は、筑後平野の西辺、筑後川左岸の形成された低位丘陵上に位置する。昭和50年初頭から継続的に実施されている筑後国府跡の発掘調査に伴って8世紀初頭から9世紀末に至る様々な遺構から黒色土器A類の杯・椀・皿・甕などが出土。本稿では、筑後国I期国府(7世紀末から8世紀前半)、及び同II期国府(8世紀前半～10世紀前半)段階の遺構から出土した4例を報告する。

##### 第37次調査S K1601土壇出土の黒色土器A類(図16)

第37次調査地点は筑後国II期国府政庁跡である阿弥陀地区の北東約300m付近の、筑後川を臨む丘陵の東北縁端に位置し、溝によって丘陵端を切り取るかのように設けられた区画の内部の土壇S K1601から8世紀半ば頃の供膳形態の土師器、須恵器などとともに黒色土器A類杯が出土している。黒色土器杯(1)は、内面は体部に丁寧な縦方向ヘラミガキを施したのち、黒色処理を施す。外面は器面の荒れが著しい。なお、区画する溝には出入口と考えられる陸橋部が2ヶ所認められる。

##### 第89次調査S D3856大溝出土黒色土器A類(図16)

黒色土器盤(63)は、筑後国成立前に設置された先行官衙の東限を画する7世紀後半の大溝S D3856(幅7～10m、深さ約1.5m)の上層(7世紀末～8世紀前半)から大量の土師器、須恵器、陶硯類、鍛冶関係遺物とともに出土したもので、外面の器面は荒れが著しく、調整方法は不明であるが、底部から直線的に短く立ち上がる。内面は底面を一方向の細かなヘラミガキを施したのち、体部の横位の細かなヘラミガキを行い、黒色処理を施す。S D3856大溝の東隣接地(第199次調査)では集落の実態は不詳であるが、8世紀前半～同中頃の、同貼り付け竈・長煙道を持つ竪穴住居が検出されており、それらに関連するものであるかも知れない。調整方法や形態的特徴が陸奥国中部の北上川下流域付近の内面黒色処理土器盤<sup>6)</sup>に類似する。

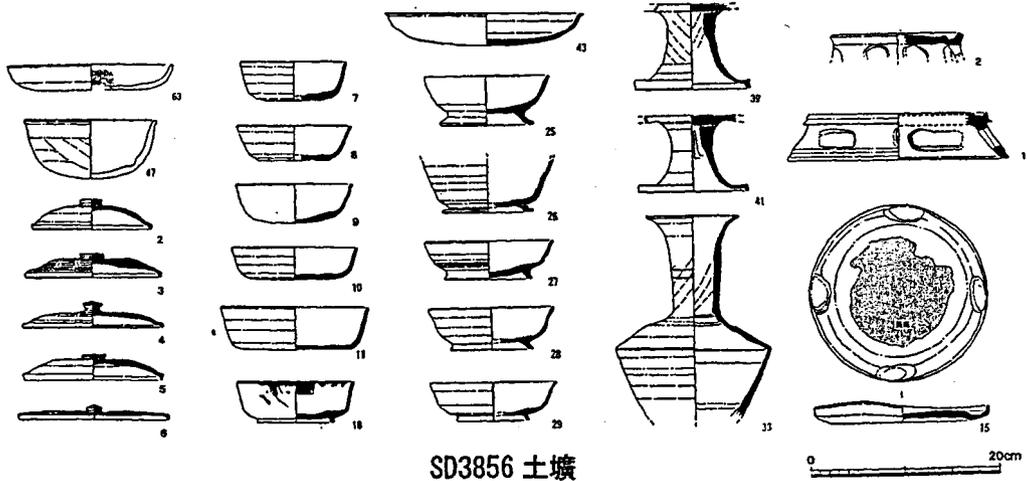
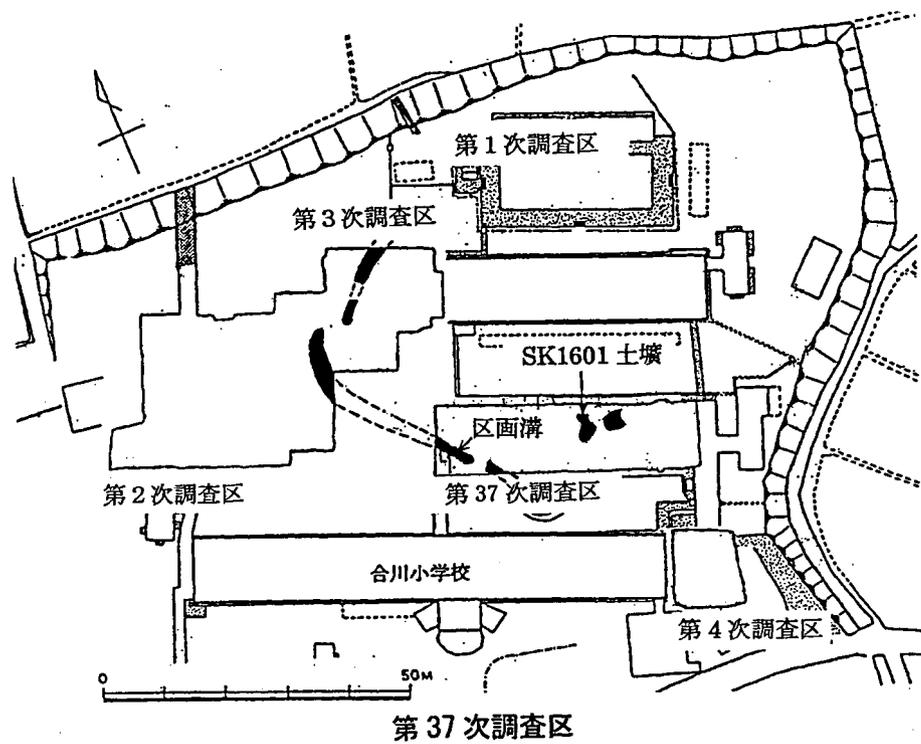
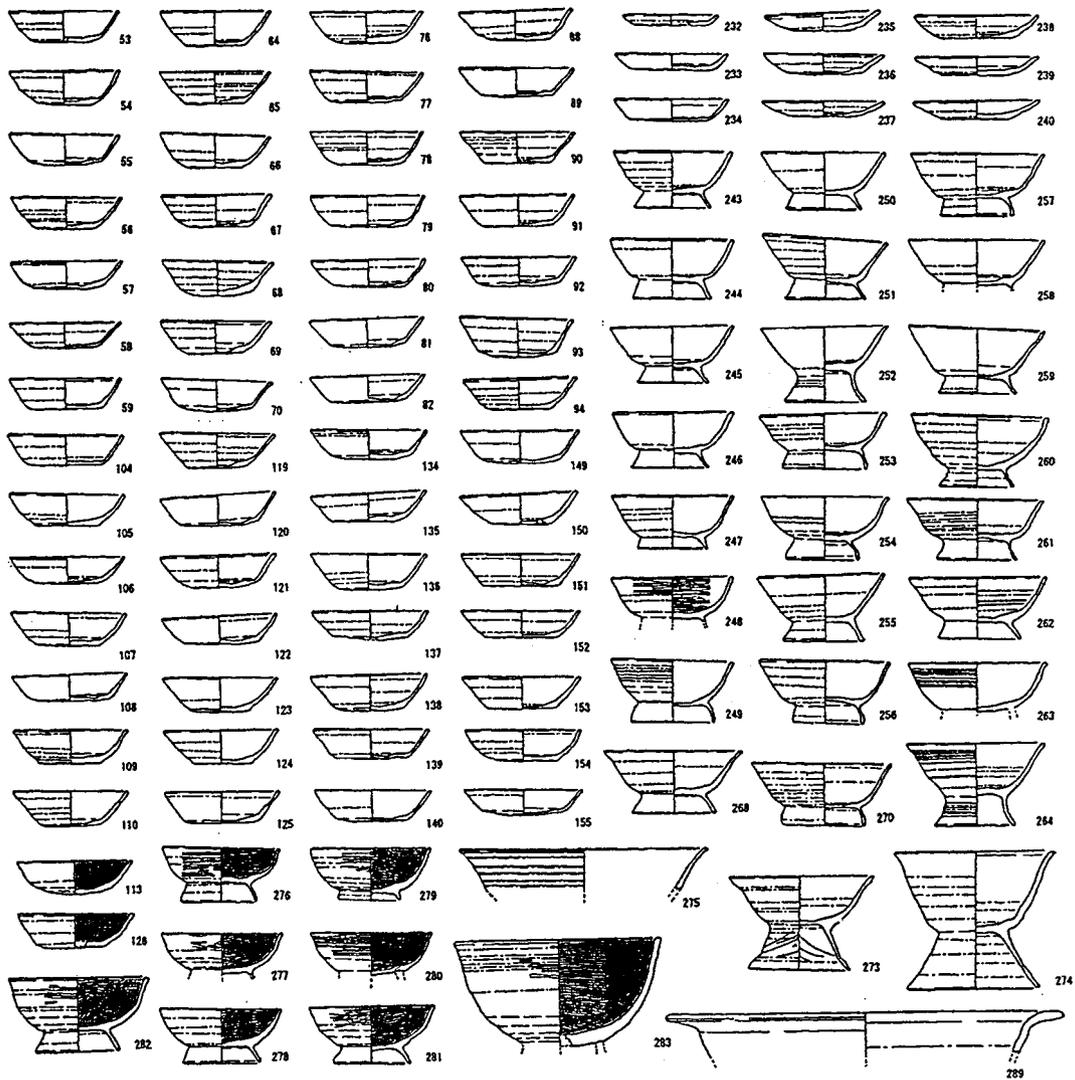
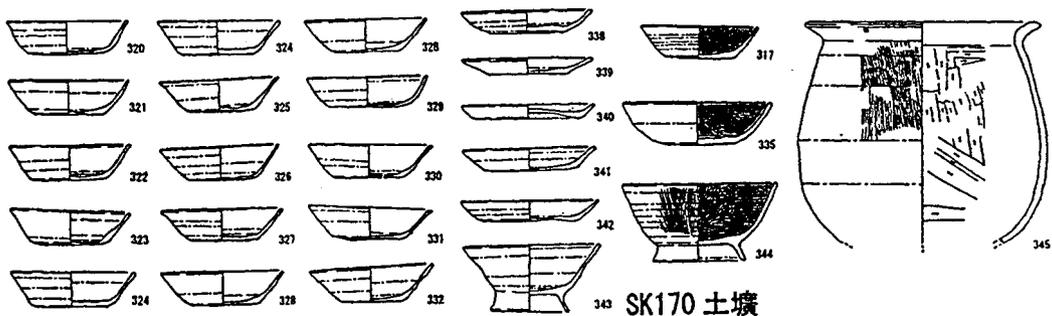


图16 筑後国府跡出土遺物① (1/8)



SK 1 土壙

0 20cm



SK170 土壙

図17 筑後国府跡出土遺物② (1/8)

#### 第214次調査SK1土壌出土の黒色土器A類 (図17)

Ⅱ期国府政庁跡の東南約100～200m付近では、多くの四面庇建物とともに多量の俱膳形態の土師器類を廃棄(埋納?)した土壌が多数確認され、貿易陶磁や施釉陶器や、「守館」などの墨書土器を伴うことからⅡ期国府に伴う国司館跡に比定されている。その南辺地区で検出された土壌214SK1から多量の俱膳形態の土師器とともに黒色土器A類の杯・椀・が出土した。いずれも外面は回転ヘラケズリで、内面はヘラミガキを施したのち、黒色処理を行う。黒色土器A類杯は平底をなすもの(126)と、丸味を持つもの(113)があり、椀(276～283)は高台部が高く、丸みを持ちながら立ち上がる。国司館一帯では周辺こうした饗宴に使用したと考えられる多量の供膳形態の土師器を一括投棄した土壌が多数検出され、黒色土器A類を伴出するものが多い。9世紀末頃の所産と考えられる。

#### 第214次調査SK170土壌の黒色土器A類 (図17)

SK170土壌は前述のSK1と同じ調査地点に位置する。黒色土器杯は、体部が丸味を持つやや大振りのもので、直線をなすものがあり、同じく椀は、直線的な体部を持ち、内面に黒色処理を施す。9世紀後半頃に比定される。第214次調査の事例は、国司館の饗宴に使用した供膳形態の土師器を一括投棄した土壌に供伴するもので、付近では9世紀後半～同末頃の同様の土壌が多数検出されている。少量ではあるが、それらの土壌に供膳形態の黒色土器が含まれていることが多い。

## 5. 東北系集落とは

以上、東北系と考えられる遺構・遺物をもつ集落遺跡をみてきたが、これらの遺跡は、黒添・赤木遺跡は8世紀中頃から後半に、雑餉隈遺跡は8世紀同後半に、浦田遺跡は8世紀後半～9世紀初頭を主体とした時期にそれぞれ比定される。

これらの遺跡で、在地の土器とは異なる東北系の土器などを伴出した遺構は竪穴住居と土壌である。まず、竪穴住居は、若干平面形が、横長あるいは縦長気味の例もあるが、略方形を基本とする。主柱穴は黒添・赤木遺跡の例ではほとんどの住居が4本柱構造であるが、雑餉隈遺跡では2例のみで、浦田遺跡のように13軒全く認められない。

竈は壁を切り込まず、壁面に粘度を貼り付けて構築する「貼り付け構造」と、壁面を掘り込み、竈本体を構築する「張り出し構造」の2者があり、また煙道は竈燃焼部から長さ約1m以上の長煙道を持つ例や煙道が短いもの、あるいは煙道がなく直接、焼部に煙出しが付くもの、煙道が認められない例などがある。

黒添・赤木遺跡はすべてほとんど4本柱構造を持ち、北辺あるいは北西辺に長煙道を付設した「貼り付け構造」の竈を付設する。雑餉隈遺跡は、2例が4本柱構造をとり、竈も北辺が主体を占めるが、東辺に設置付設する例(55号)もみられ、貼り付け構造、張り出し構造が相半ばする。煙道は長煙道が主体を占めるが、張り出し構造を持つ例(55号)に短い煙道が付くものもある。浦田遺跡では、大半が北辺に長煙道付の貼り付け構造の竈を設置するが、西辺の例(SB003・006)もある。主柱穴は見当たらない。

一般に奈良時代の東北地方の竪穴住居は、平面プランが方形で、4本の主柱穴を持ち、北辺に長煙道付の貼り付け竈を持つという特徴を有するが、この3遺跡の中で最も東北地方の住居様相に類似するのは黒添・赤木遺跡である。類似するというより、東北地方の住居そのものといえる。しかし雑餉

隈・浦田両遺跡では、東北地方の住居形態を有する例が主体を占めるものの、竈を北辺以外に設ける場合や短い煙道や張り出し構造の竈を採用するなどの変化が認められる点で、東北地方の住居とは異なり、同時代の北部九州の竪穴住居に類似する。つまり、住居様相の在地化が認められる。

本稿では詳しく触れなかったが、雑餉隈遺跡で検出された58軒の竪穴住居はその主軸方位（計画方位）がA～Cの3群に大別され、重複関係や、各住居跡の出土土器からA→B→Cという時間的な差と考えられる。東北系土器はその3群すべてから出土するが、支柱穴の4本柱構造はA群のみで、B・C群には認められず、竈設置場所は北辺から東辺へ、竈構造は貼り付け構造から張り出し構造へ、また煙道は長煙道から短い煙道へ、燃焼部に直接煙出しが付くものや煙道がないものへ移る傾向が認められる。この変遷を比較した黒添・赤木、雑餉隈、浦田各遺跡にあてはめると、黒添・赤木遺跡が最も先行し、浦田遺跡が最も新しく、雑餉隈遺跡は双方にまたがるその中間的な様相をもつ遺跡といえる。

また集落の構造では、黒添・赤木遺跡は比較的規模の大きい住居を中心にしてその周囲に数軒の中、小規模の住居が取り巻く世帯共同体のような集落構造をとるなど、奈良時代の東北地方の集落形態に類似した特徴を持ち、他の2遺跡も住居の分布状況から黒添・赤木遺跡にみられるような単位集団が複数集まって集落を構成しているものと考えられる。

伴出土器で特徴的なのは、内面黒色処理土師器、すなわち西日本で黒色土器A類と呼ばれるものと土師器甕である。黒色土器杯は在地の土師器杯と比べて体部が丸みを持って立ち上がり、深みがあるものが多く認められる。土師器甕は在地のものが器壁が厚く、やや長めの球形胴、丸底をなし、外面はハケ目調整、胴部内面は縦、あるいは斜め方向の粗いヘラケズリ調整が主流を占めるのに対して、東北系の土師器甕は、器壁が薄く長胴気味で平底をなし、輪積み痕、あるいは底面部外面に葉脈痕を持つ例や、肩部に段の痕跡を持つ例など東北地方の土器様相に類似する共通点が認められる。

以上、黒添・赤木、雑餉隈、浦田各遺跡は、住居、伴出土器の様相が在地のものとは異なり、東北地方に関連性が認められ、営まれた8世紀後半を中心とした時代という背景を考慮すると、移配された俘囚に関連する集落と考えることに大過ないと思われる。

## 6. 東北系集落と移配記事

先の「はじめに」の項で、西海道に関する俘囚の内国移配に関する史料を上げたが、黒添・赤木遺跡の例でも解るようにはこれらの集落遺跡は突然、東北系性格を持つ集落として現れ、同時期の在地集落と違って激しく住居が重複することもなく、比較的短期間に終焉を迎えている。二度と原住地に戻ることはない俘囚にとって集落の終焉とは他の場所への移動、つまり、再移配されたことが考えられる。その行為は集落単位、あるいは住居単位、個人単位で行われる場合もあったと思われる。また戦闘武芸に優れた俘囚は防人として大宰府管内の前線に兵力として送られたことも想定される。天平十(738)年の『筑後国正税帳』には陸奥国から筑後国に送られた俘囚62人が同年4月26日から年末まで食糧の支給を受けていたことがみえ、日数を経るたびに食糧の支給を受ける人数が減り、最終的には48人となっている。死亡や逃亡も考えられるが、他所への再移配（移動）も考えられる。他の在地集落と違って移配されてきた俘囚集落の消長は政治的政策による場合が多かったと考えられる。

ところで、筑後国府跡第37次調査で確認された溝による区画は、国府政庁の至近距離に位置しなが

ら、直線ではなく、弧状をなす溝で区画され、内部の土壌から8世紀半ば頃の供膳形態の土師器類とともに俘囚系土器である黒色土器A土類杯が出土している。時期的には『筑後国正税帳』にみえる移配記事よりやや下るが、国府の一角に筑後国に移配された直後の俘囚を収容する施設が存在したことは彼らを監督、警備するうえで当然であり、想像の域を出ないが、第37次調査で確認された区画はこうした俘囚などを移配先が決まるまでの期間、収容する施設である可能性も考えられる。

筑後国府跡第214次調査のSK1、170土壌から大量の供膳形態の土師器とともに出土した黒色土器は、9世紀後半代、国司館で開かれた饗宴に黒色土器を使用する少人数の者の存在を暗示するものである。それはかつて、征夷の対象であり、帰降して移配されてきた俘囚の使用する器であり、土壌から出土した黒色土器を使用したのは筑後国内の俘囚集団をまとめる俘囚長たちであった可能性が高いと考える。当時、国司は夷俘専当を兼任し、俘囚の長である夷俘長（俘囚長）を通して国内の俘囚の支配し、優恤・教諭の一環として季節ごとに国司館に俘囚長たちを招いて饗宴を開いて禄物・衣服・食料を与え、その掌握に努めた<sup>8)</sup>。『類聚国史』（190）には9世紀前半の天長五（828）年に豊前<sup>9)</sup>・豊後<sup>9)</sup>・肥前<sup>10)</sup>の3国に一人ずつ俘囚の叙位記事が、また天長十（833）年には、筑後国に財力だけでなく「夷第五等」という勲位を持った俘囚の存在がみえる<sup>11)</sup>。国司館で開かれた饗宴で黒色土器は俘囚集団をまとめるこうした俘囚長らが使用した可能性が高い。筑後国府跡の国司館から出土する黒色土器はそうした饗宴の姿を物語っているのではないかと推測する。

西海道の8～9世紀の集落跡・官衙跡では、保水性に優れた黒色土器の出土量が絶対的に少なく、盛行しなかった理由として、その土器が「移配された俘囚の器」ということが大きな背景があったのではないかと考える。こうして筑後国府跡では9世紀後半代盛んに国司館で饗宴が開かれた跡が確認されるが、9世紀紀末～10世紀初頭頃を境にしてそうした痕跡は確認できなくなり、東北地方の内面黒色処理土器の系譜を引くと考えられる黒色土器A類は姿を消し、新たに内外面を黒色処理したB類が出現することになる。

## おわりに

西海道の古代遺跡で新たに東北系集落と考えられる遺跡の概要を紹介して、それらの集落遺跡における住居や土器に認められる様相が東北地方のものと類似することから、時期的に見て律令政府が対蝦夷政策の一環として行った俘囚の内国移配によって作り出された集落である可能性が高いことを述べた。また、西日本地方では黒色土器の研究は器形的編年論、技術論、生産あるいは流通との関係で語られることが多い。筆者は、西海道において奈良時代は東北系住居を持つ集落において東北系土師器との供伴する例が多いことから、東北地方の土師器に認められる内面黒色処理の技法が、律令政府の行った俘囚の内国移配政策により、俘囚によって西海道に九州に持ち込まれたものとする。しかしまた、東北地方で盛行した保水性の高い内面黒色処理土器も西国では辺境の民である俘囚の持ち込んだ土器であるが故に盛行することもなく、差別化された俘囚の生活空間でのみ、その技術が維持されたものとする。

推論に推論を重ねた稿であったが、九州地方の黒色土器の出現と消長の背景にこうした事情も考えられるのではないかと思う。

## 註

- 1) 片桐浩幸 1997「讃岐出土の東北系土器について—とくに黒色土器について」『香川県埋蔵文化財センター紀要3』
- 2) 小田和利 2010「集落と鉄器—北部九州を中心として—」『官衙・集落と鉄』(第14回 古代官衙・集落研究会報告書所収) 奈良文化財研究所編
- 3) 木下修 1987『黒添・赤木遺跡』(『黒添・法正寺地区遺跡群』所収) 福岡県苅田町文化財調査報告書 第6集 苅田町教育委員会
- 4) 宮井善朗 1998『雑餉隈遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第569集 福岡市教育委員会
- 5) 堤安信・立石泰久 1983「浦田遺跡」(『西原遺跡』所収) 佐賀県文化財調査報告書 第66集 佐賀県教育委員会
- 6) 松村一良 1994「筑後国府跡」(『久留米市史』第12巻資料編所収) 久留米市史編纂委員会編 久留米市  
神保公久 2006『筑後国府跡—平成17年度発掘調査報告・概要報告』久留米市文化財調査報告書 第232集 久留米市教育委員会  
神保公久 2009『筑後国府跡—平成20年度発掘調査報告・概要報告』久留米市文化財調査報告書 第282集 久留米市教育委員会
- 7) 牡鹿柵・郡家推定地である赤井遺跡御下地区の8世紀中葉のS I 429住居出土土師器盤に形態・調整が類似する。  
佐藤敏幸 2001『赤井遺跡 I』矢本町文化財調査報告書 第14集 宮城県矢本町教育委員会
- 8) 『日本後紀』弘仁三年六月条、『類聚国史』(190) 弘仁四年十一月庚午条
- 9) 『類聚国史』(190) 天長五年閏三月乙未条
- 10) 『類聚国史』(190) 天長五年閏七月丙申条
- 11) 『類聚国史』(190) 天長五年閏二月丁丑条

## 引用・参考文献

- 森孝 1989「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」『古文化談叢』21 九州古文化研究会
- 佐藤浩司 1989「北部九州における黒色土器の生産と流通—豊前北部地域とその周辺—」(『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集 I) 横山浩一先生退官記念事業会
- 田中正日子 1992「大宰府の内外問題と兵制の動向」(『北部九州の古代史』所収) 有明文化を考える会編 名著出版
- 今泉隆雄 1992「城柵を中心とする古代官衙」(『新版古代の日本』第九巻 所収) 角川書店
- 松村一良 1990『筑後国府跡・国分寺跡—平成元年度発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書 第62集 久留米市教育委員会
- 下向井龍彦 2000「武士形成における俘囚の役割」(『史学研究』228号所収) 広島史学研究会
- 松村一良 2009『筑後国府跡(2)』久留米市文化財調査報告書 第284集 久留米市教育委員会
- 菅原祥夫 2011「宇多・行方郡の鉄生産と近江」(『福島県文化財センター白河館研究紀要2010』所収) 福島県文化振興事業団